

論文の要旨

学籍番号 62020003

氏 名 杉山いずみ

題 目	生活介護事業所における集団活動が 重症心身障害者の意味のある作業となる支援
<p>要旨</p> <p>生活介護事業は、障害者総合支援法サービスの日中活動系障害福祉サービスで、常時介護が必要な人に対する事業である。在宅で暮らす重症心身障害者（以下、重症者）は、大人としての社会参加の場として生活介護事業を利用している。生活支援員と看護師は、重症者の支援に追われ、重症者の反応を見逃すことがある。そのため、生活支援員と看護師は、重症者との意思疎通が困難な状態になり、重症者にとって意味のある作業が行われていないことがある。</p> <p>本研究の目的は、生活介護事業所の集団活動が、重症者にとって意味のある作業となるために、重症者への支援について、作業療法士（以下、OT）と生活支援員および看護師が、共に考え実践することによる効果を検討することである。本研究は、3つの研究で構成している。</p> <p>研究 1 では、生活介護事業所における利用者の日中活動を作業参加の視点で分類し、作業参加の特徴に合わせた支援の方向性を検討した。方法は、利用者 17 名に人間作業モデルスクリーニング（以下、MOHOST）を実施し、MOHOST の下位項目の合計得点を用いて、クラスター分析で利用者を分類した。そして、分類された利用者の作業参加の特徴と介入方針を事例から検討した。結果は、利用者は 3 群（A 群、B 群、C 群）に類型化された。各群の事例より、A 群は受け身的な作業参加、B 群は傍観的な作業参加、C 群は作業参加していなかった。介入方針として、A 群は新たな役割の創出や更なる挑戦により自己効力を向上させる、B 群は探索から有能感・達成感を導き出す、C 群は感覚欲求を満たして探索を促す。そして、B 群と C 群に含まれている重症者が、安心して探索できるよう介入することが示唆された。</p> <p>研究 2 では、生活介護事業所における生活支援員の重症者に対する集団活動支援から、重症者への関わりの内容を解明し、重症者への集団活動支援について検討した。方法は、集団活動での生活支援員が行う、重症者への関わりを撮影して、観察データを逐語録に起こした。そして、生活支援員の重症者への関わりを、SCAT（Steps for Coding and Theorization）で分析した。結果は、重症者への集団活動支援の構成概念は 44、サブカテゴリーは 15、カテゴリーは 4 つ生成した。カテゴリーは、【集団活動参加の誘い】【共同で行う集団活動】【良好な関係の維持】【表現の尊重】とした。そして、生活支援員の支援には、重症者の意志への働きかけが不十分であることが示唆された。そこで生活支援員と協業して、重症者の反応に合わせた支援、重症者との楽しみの共有、重症者の興味に沿った集団活動の提供、重症者の反応に対</p>	

して応答することを、支援に取り入れる必要があると考えられた。

研究 3 では、OT と生活支援員および看護師が共に、重症者に対する集団活動支援における現場の課題と支援の方策を考えて実践することによる、生活支援員と看護師の意識や支援の変化を明らかにした。方法は、参加型アクションリサーチを用いて、支援の課題を挙げ、計画、実践、評価・内省を行い、計画の修正を周期的にらせん状に進んでいくスタイルをとった。現場の課題は、集団活動のねらいと重症者の反応を見る視点が共有されていないことであった。課題解決の計画は、集団活動のねらいを生活支援員と看護師に伝えること、重症者の反応をみる視点に気づいてもらうことを意図した、活動参加記録を作成して記載することであった。実践を行った評価・内省では、生活支援員と看護師は安心して集団活動支援を行い、重症者の表情、目の動きなどに意識を向け、重症者の反応に気づくようになった。初期計画を再検討したところ、研究メンバーは生活支援員と看護師の重症者への支援の変化を実感し、実践を継続することを希望した。そこで、集団活動のねらいの定着と、重症者の反応の記録を積み重ねることを再計画した。実践を行った評価・内省では、生活支援員と看護師は主体的に重症者が楽しむ支援を行うようになり、重症者の反応への気づきが広がり、反応の違いが判るようになった。重症者の変化は、MOHOST の下位項目である日課と社会集団が向上していた。しかし、重症者に対する支援の効果は、長期の時間をかけて検証する必要があると考えられた。本研究から明らかになったことは、生活支援員と看護師が、重症者が楽しめることを実感することが、支援の達成感につながり、支援の自信になることであった。それを可能にしたのは、重症者と一緒に集団活動を行うことが共通の認識になり、安心して支援ができるようになったことである。また、立場や専門性が異なる生活支援員と看護師に対して、教えるのではなく活動参加記録の記載を通して、重症者の反応に気づき、その違いが判るようになったことで、自ら重症者を楽しませる支援に変化したことが考察された。

集団活動を楽しむことは、重症者にとって意味のある作業といえる。そこで集団活動が重症者の意味のある作業となるために、集団活動のねらいが生活支援員と看護師の共通の認識となり、ゆとりのある支援により、重症者の安心して集団活動に参加できるようになった。さらに、生活支援員と看護師が重症者の反応に気づきその違いが判ることで、重症者が楽しめる支援が行われることで、重症者にとって意味のある作業となる集団活動に変化した。また、生活支援員と看護師の変化をもたらした OT の関わりは、集団活動における支援の状況を理解し、生活支援員と看護師の集団活動の思いを共有し、自ら考えて実行できるように関わった。そして、生活支援員と看護師が、重症者に対する思いや自身の支援を振り返る機会を、意図的に設定したことがストレスや感情を緩和することになった。このように OT の関わりは、重症者の支援という、生活支援員と看護師の作業を変化させた関わりであると考えられる。

本研究において、立場や専門性が異なる OT と生活支援員および看護師が、それぞれの視点を持っていることを理解して、共に現場の問題解決のために行った実践は、保健福祉学の理念の実現に貢献できるといえる。